

行雲流水

No.289 令和5年4月18日

たね ま く ひと
種を蒔く人

校長 寒河江 正人

新学期・新入生を迎えて、学校じゅうが活気づいている。
春、春、春。いい季節だなあ。

20代、30代、どんなに荒れた学校に勤務していても、学級担任として、卒業生を送り出すたびに「ああ、中学校の教員の**道**を選んでよかったなあ。」と思った。
結婚して子どもを育てて、親の気持ちを実感を伴って考えるようになると、「ああ、中学校の教員の**道**を選んでよかったなあ。」と思う気持ちは、もっと強くなり、一層泣けた。

と、同時にいつの頃からか「この仕事って、**種を蒔く仕事**だなあ。」と思えるようになった。

「**中学生の思春期**」というものは、**嵐の時代**だ。
荒れた**学校**、荒れた**生徒**。その荒れた**大地**を、荒れた**心**を、**耕し、また耕し、種を蒔く**。
荒れた**大地**は、**手**を抜くと、**氣**を抜くと、たちまちまた荒れ果てる。
種を蒔いて、やっと**芽**が出たと思っても、**手**を抜くと、たちまち枯れてしまう。

芽を出す**タイミング**も、**スピード**も、生徒一人ひとり、みんな違う。
正直、「もう**芽**を出さないのではないか。」と挫けそうに、諦めそうになることもある。
「どうして**芽**を出してくれないんだろう。」と悔しく、情けなくなることもする。

私たちの世代は、「**それ**」を**何十回、何百回も**、ひたすら経験してきた。
それでもへこたれず、また、せっせと生徒の**心**を耕し、**種**を蒔き、**芽**が出たら、**水**をやり、**肥し**を施し、大切に育てる。自分の意志で、中学校の教員の**道**を選んだのだから。

ことだま
「**言葉**」

その一言で 励まされ、その一言で 夢をもち、
その一言で 腹がたち、その一言で 落胆し、
その一言で 泣かされる
ほんのわずかな一言が、不思議に大きな力もつ
ほんのちょっとの一言で